

# 物語文読解における熟達者と非熟達者の違い

## —インタビューと読解方略構造の分析を通して—

吉野 巖 ・ 木下 あゆみ#  
北海道教育大学札幌校

スカーダマリアとベライターによると、読みの熟達者はテキストベースと状況モデルを照らし合わせ、双方を変容させながらテキストについての一貫した理解に到達することができるが、非熟達者は表面的なテキストベースを構築するため状況モデルと矛盾する情報は見落としてしまう傾向があるという(村田,2001)。物語文の場合、読解が上手な人と苦手な人とは、具体的な読解方略はどのように異なるのだろうか。物語文では、登場人物の心情を想像したり、状況について想像したりすることが行われると考えられるが、体系的な研究は行われていない。そこで本研究は、熟達者と非熟達者の物語文の読解過程をインタビューと読解方略質問紙を通して調べることとした。具体的には、因子分析によって読解方略を分類した上で、熟達者と非熟達者間での違いを調べるとともに、物語の筋や登場人物の心情について説明を求め、それを詳細に分析する。

### 方法

**被験者** 本実験: 読解熟達者として北海道教育大の学生10名、非熟達者として札幌市内の専門学校生9名の計19名。補足実験: 上記とは別の北海道教育大の学生37名。

**材料** ①**物語文**. 江國香織著「デューク」と宮沢賢治著「いちょうの実」の2種(いずれも3000字程度)を用いた。「いちょうの実」は、表面的な筋の展開は理解しやすいが、作者の深い意図を把握するのは難しい物語である。本実験の被験者は2種の物語のうち一方のみを読んだ(熟達群: デューク群/いちょう群各5名、非熟達群: 4名/5名)。②**読解方略質問紙**. 犬塚(2002)の読解方略質問紙の中から物語文の読解に用いられると考えられる28項目と予備調査から作成した6項目の計34項目である(表2参照)。③**理解テスト**. 物語の「筋」(5問×各3点)、「心情」(5問×各3点)に関する問題計10問(記述式)からなる。心情に関する問題は、文中に直接の記述はないが物語の展開上推測可能な登場人物の心情について問うものであった。

**手続き** ①**本実験**. 各被験者は、まず物語を読み、読解方略質問紙の評定(5段階)を行う。続いて、読んだ物語文を見ながらその物語に関する理解テストへ解答する。解答終了後、テスト問題に関するインタビューに答えてもらう。インタビューは、テストの各設問に対する被験者の解答を示しながら、そのように考えた根拠や、関連する質問を行う。②**補足実験**. 各被験者は、2種の物語のどちらか一方のみを読み、読解方略質問紙の評定のみを行う。補足実験は、読解方略構造の分析において、より多くの被験者の評定データを得るために行った。

### 結果と考察

**テスト得点** 採点は詳細な基準により実験者が行った。文章群毎に熟達者・非熟達者間でt検定を行ったところ、デューク群では総計・各得点とも有意差は見られなかつ

たが、いちょう群では、総計と筋問題で有意差( $t(8)=5.07, 3.45, p<.01$ )、心情問題に有意傾向が認められ、いずれも熟達者の得点が高かった。深いレベルでの理解を必要とする物語において、熟達度の違いが明確になったと言える。

表1. 理解テストの各問題の得点 (\*:  $p<.05$ , †:  $p<.10$ )

	「デューク」筋	心情	総計	「いちょう」筋*	心情†	総計*
熟達群	11.7	9.8	21.5	12.3	10.5	22.8
非熟達群	12.2	9.5	21.7	9.9	7.8	17.8

**インタビューの説明得点** テストの各設問に対応するインタビューの発言内容について、どの程度詳しく説明できたかを1(自分の考えをも加味した必要十分な説明)~9(説明を行うことができない)でレベル分けした。この説明得点について熟達群・非熟達群間でt検定を行ったところ、デューク群では有意傾向( $t(3.05)=3.02$ )、いちょう群では有意差( $t(7.95)=4.75$ )が認められ、いずれも熟達者の方がより細かな説明を行うことができていた。個々の発言内容を見ていくと、熟達者は既有知識と照らし合わせながら自分なりの表現で説明を行うことが多いのに対し、非熟達者は文中の言葉のみからなる表面的な説明が多かった。

**読解方略構造** 本実験・補足実験の全56名の被験者の読解方略項目に対する評定値について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い、最終的に30項目から6因子を抽出した(表2)。これらのうち、意味明確化・モニタリング・要点把握因子に関しては犬塚の説明文の読解方略構造と部分的に一致した。また状況モデル構築因子は、新たに物語文の方略として加えたもののほとんどが入っており、物語文読解において特徴的な因子であるといえる。本実験の熟達群・非熟達群間で各因子得点を比較したところ、要点把握因子のみで熟達者の因子得点が有意に高い傾向がみられ( $t(18)=1.93$ )、物語文で特徴的な状況モデル構築因子の因子得点には熟達度による差は見られなかった。要点把握因子に含まれる項目は、いずれも国語のテストの状況下でよく採用される方略である。物語読解時には後でテストを行うことを伏せてあるため、熟達群においてこれらの方略が多く使用されたのは、教育大生である彼らが受験用の読解方略を身につけていることの表れといえるかもしれない。

表2. 読解方略の6つの因子と質問目録

意味明確化因子	全7項目 ( $\alpha=0.86$ )
・一度読んだだけでは理解できないときは、もう一回よんで理解しようとする	
・分からないところはゆっくり読む	・難しい言葉は自分の言葉で言い直す
状況モデル構築因子	全5項目 ( $\alpha=0.76$ )
・登場人物の心情を意識して読む	・具体的なイメージを思い浮かべて読む
・物語の時間の流れを意識して読む	・登場人物の人物像や人間関係を意識する
モニタリング因子	全4項目 ( $\alpha=0.74$ )
・読みながら大切なところとそうでないところを区別する	
・自分がどこまで分かっているかチェックするような質問を自分にする	
知識活用とメタ認知因子	全5項目 ( $\alpha=0.72$ )
・自分が今まで知っていることと比べて読む	・自分の経験と照らし合わせて読む
・どれくらい難しいかを判断して読むスピードを調節する	
要点把握因子	全6項目 ( $\alpha=0.68$ )
・段落ごとのまとめを考えながら読む	・大切なところに線を引く
・文章の構造を考えながら読む	・コメントや内容をまとめたものを書き込む
全体像把握因子	全3項目 ( $\alpha=0.56$ )
・客観的に読む	・分からない言葉が出てきたときは飛ばして先を読み進む